



Title	表象としての <木戸孝允> : イメージの一五〇年史 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	高橋, 小百合
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15994号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92383
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Sayuri_Tsuchiya_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）氏名：高橋（土屋）小百合

主査 教授 押野 武志
審査委員 副査 教授 阿部 嘉昭
副査 教授 川口 暁弘

学位論文題名

表象としての〈木戸孝允〉——イメージの一五〇年史——

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、明治期から昭和期の司馬遼太郎の活躍まで、時代ごとの木戸孝允（桂小五郎）像の特徴と変容について分析し、ひいては〈維新〉のイメージの変遷と、そうしたイメージが成立した当時の社会や思潮との関係を論じたものである。

その政見の先進性から開明的政治家として、あるいは政局上における balanサーとして、あるいは挫折を知る憂愁の人として、一方では〈恋〉に身をやつす多感の人として、さらには颯爽たる剣士として、さまざまなイメージを伴いながら木戸孝允の造型はおこなわれてきた。本論文は、こうした多様な木戸孝允像がどのように成立して、いかに「志士・桂小五郎」と「政治家・木戸孝允」とに二極化して語られていったのか、その歴史的経緯を通史的に明らかにした。

本論文の成果は、以下の三点にまとめることができる。

第一に、新たな研究領域を開拓した点である。木戸孝允の事績や人物に関する研究はさかんにおこなわれている一方で、活字メディアのみならず、ブロマイド、錦絵、演劇、映画と多様なジャンルや大衆文化における木戸孝允像の受容に広く目配せして、その特質を通史的に追った論考はこれまでなく、本論文は貴重な試みといえる。さらに、ブロマイド、錦絵、映画といった異なる視覚メディア間における木戸孝允像の違いも分析した優れたメディア研究としても評価することができる。

第二に、否定的な木戸孝允像成立の歴史的な背景を明らかにした点である。「維新三傑」のひとりとして、維新史のスターであった木戸孝允が脇役に転じたその時代的な背景に存在する価値観の転換を明らかにした優れた言説分析になっている。

第三に、第二の成果に関連して、優れた司馬遼太郎論を内包しているという点である。木戸孝允が志士の代表としての座を去ったのは、司馬遼太郎の短編小説「逃げの小五郎」の影響が大きかったとする定説を再考すると同時に、「逃げの小五郎」所収の短編集『幕末』全体から本作をとらえ直し、『幕末』は、〈革命児〉の不在や一貫した理念の存在の否定という「俯瞰」の方法を用いて、維新史にまつわるヒロイズムを解体するテキストであると位置づけた。「逃げの小五郎」も、同作収録の他の小説となんら齟齬するものではなく、かつ「幕末暗殺史」としては一見異質な「逃げの小五郎」を擁することで、『幕末』の維新小説中に特異的な意義を持つ作品として再評価した。坂本龍馬、西郷隆盛、大久保利通らを高く評価したとされる司馬遼太郎のいわゆる「司馬史観」を新たに捉え直すための視座を提供している。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会において、上述の研究成果に関して概ね説得的に論証されており、木戸孝允の表象史研究として学術的価値があるものと判断した。

ただし、問題がないわけではない。明治期から昭和期にかけての木戸孝允に関する膨大な資料を調査・渉猟した成果が本論文に反映されているのは間違いないが、「イメージの一五〇年史」と副題を付したものの、戦後の言説に関しては、司馬遼太郎作品と大佛次郎『鞍馬天狗』シリーズの一部をもってこれに充てるのみであり、考察が不十分であった。さらに、木戸孝允像に多大な影響を与

えたとされる徳富蘇峰の講演録『木戸松菊先生』については言及があるものの、木戸孝允に相当な紙幅を費やした大著『近世日本国民史』については、触れられていない。

また、大衆文化のレベルにおける志士としての桂小五郎と幾松に関する物語の豊かさを強調するために、政治家としての木戸孝允の史実に基づく近代史学の語りの貧しさを対置させており、実証主義とは異なる歴史学の方法論に対する認識が十分ではなかった。

このような問題点は、木戸孝允像の特質および変容のプロセスを通史的に、そしてジャンル横断的に論じつつ、同時代言説との関連性も含めて多様な角度から再検討するという、本論文の対象領域の広さと射程の長さ由来のものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。今後、本論文で触れられなかった木戸孝允に関する言説分析を充実させれば、それらの課題は克服され、さらなる研究成果も期待される。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。